多摩市における園芸ボランティア育成を成功に導くための基礎研究（3）

－多摩市、町田市における園芸ボランティア活動の実態調査と大学が向かうべき方向性とは－

山　　浩美（本学非常勤講師）
澤登　早苗（人間社会学部人間環境学科）

Primary Research for Successful Local Garden Volunteers in Tama City (3)

YAMA Hiromi & SAWANOBORI Sanae

1　はじめに

筆者らは大学のある地元多摩市において公園等の公的空間にある花壇などの維持管理を行う園芸ボランティアを育成するためには何が必要であるか、本学はどのように関わっていくべきかを明らかにするために、2007年度から研究を行ってきた。＊1

初年度は園芸ボランティアの育成において実績のある関西地方における先進事例を調査し、1年間ボランティア講座を受講した修了生たちの活動状況を考察した。その結果、関西地方では受講料を払って花壇づくりボランティアについて学びたいと思っている人が多く存在していること、園芸ボランティアとして活動する際には、セミナーで「園芸の知識と技術」と「ボランティア活動」の両方について事前に学ぶことが当たり前のこととして受け入れられていることが明らかになった。また、ボランティアの実践現場では、ボランティア＝無償の労働奉仕ではなく、「時間を提供することで、園芸活動を通じて更なる知識や技術を得ることができる」体制が整えられており、このことが自ら考え、活動できる実働可能な花壇ボランティアの育成に大きく寄与しているものと推察された。

二年目、2008年度の調査では、関西地方において活動しているタイプが異なる2つの園芸ボランティアグループに対して詳細な聞き取り調査を行うとともに、多摩市及び周辺地域における園芸ボランティアの活動状況の把握を試みることで園芸ボランティア活動を充実させ、その自主性を高めていくためには、何が必要であるかを検討した。＊2

その結果、関西地方の調査では、身近な公園にある花壇を美しく維持管理したいという明確な活動目的に向かって最初から自発的に園芸の知識、技術、情報の習得に努め、活動システムを整備し、向上させるために勉強しているグループと、当初は行政が主導して、町の美化という緑化活動をボランティアでやってもらおうと養成した人達が、園芸の知識や技術を習得した結果、行政主導の花壇づくりに飽き足らずに、自分たち自身でレベルの高い花壇づくりをしたいという理由で自立したグループについて調査を行った。両者のグループに共通していたのは、いずれも活動が活発で自主性に富んでいること、行政との関わり方については覚書を交わすことで活動の内容を明確にし、必要な支援を受けながら持っている知識や技術を存分に発揮し貢献するという関係が成り立っていた。また、会員名簿作成や会則つくりなど花壇の作業と直接関係のない事についても、責任をもってスムーズに活動するために必要なこととして取り組んでいた。これらは園芸の基本的な知識や技術を共に学び、ボランティアの役割について理解するという共通の認識の上に活動し、結束を確固たるものにしてきた結果と推察された。

一方、多摩市については、アダプト制度において行政との合意書の取り交わしはあるものの形式的なものとなっている場合が少なくないようであった。その背景にはボランティアグループと行政においてボランティア活動に対する認識必ずしも十分でないという状況があり、それはボランティア教育が適切に行われることで解消される問題であろうと推察された。そのため、本学がこの問題を解決するために適切な教育プログラム提供することができる可能性があることが明らかになった。

三年目となる今年度は、多摩市と町田市など地元における園芸ボランティアの活動に関する実態調査を中心に行い、本学が公開講座として開講している「花壇ボランティア養成講座」修了生の学外での実践活動の展開の可能性

について検討し、多摩市において園芸ボランティアを養成・強化し、その活動を定着させていくために必要となる基礎的な知見を提示し、大学として向かうべき方向性を提案したい。

2　多摩市の緑化事業の取り組みについて

多摩市は、面積21平方km、東京都の中央部にあり南は神奈川県川崎市、町田市に、西は八王子市と日野市に接し、多摩丘陵の北端部を占めており自然豊かな一面と、都心からの交通の便の良さもあり人気の高い住宅地となっている。多摩ニュータウン開発の影響で1970年代には急激に人口が増え、多くの小・中学校が設置されたが、近年は少子化により統廃合が進んでいる。現在の人口は、15万人。緑豊かな一面として多摩市内の公園・緑地は約200か所と多数あり、東京都市域内での行政面積当たりの割合が1位、人口当たりでは2位と言われている。下記に多摩市が展開している主な緑化事業について紹介する。

①花いっぱい推進事業

「街かどに花を植えて市民の交流を深めること」を目的として、道路に面する花壇やプランター4㎡以上を所有しており管理できる市民2人以上のグループが参加できる活動。市から春、秋の年二回配布されるセル成型苗を利用して花壇づくりをして管理する。

対象は、学校・保育園などのPTA活動、あるいは団地の共有地での花壇などで、約70団体に配布している。

②グリーンボランティア講座

雑木林の育成管理、竹林整備、苗木やシイタケ菌の植え付け、腐葉土つくりの実習のほか、公園などの観察、植生調査、施設見学など、毎月1回、年10回でボランティアを育成する講座である。

市内のあちこちに広がる雑木林や公園を、市民のボランティアを育成することで維持管理してもらおうという緑地面積が多くある多摩市ならではの活動と言えるだろう。

③グリーンライブセンター

市の運営する緑化活動の拠点となる施設

月曜日を除く毎日、9時半から17時までオープンしており、ピラミッドギャラリーと呼ばれる花鉢や観葉植物を展示するガラス温室と園芸相談、図書設備を備えたライブホールでは、緑化関係の講座を行っている。屋外には、800㎡のロマンチックガーデンがあり草花やハーブなど年間2万株を植替えしながら管理し鑑賞できるように整えている。

④アダプト（里親）制度

「新たな地域社会の支え合いの仕組みづくりのため」に、2003年度からはじまった、道路や公園にある一定の区域について緑化や清掃美化活動をしてもらう市民参加の制度である。市民のみならず市在勤の団体グループ、大学、企業と対象は多岐におよび、市としてはこの活動を普及、啓発し一部（市役所前のプランターは市の総務課担当）の花壇を除きほぼすべての市内の公園、緑地等の花壇は、アダプト制度によって管理されている。

前回の調査（園芸文化　第6号　2009年7月発行）で報告したように、これは市民グループが申請し、市と相談の上、場所を決め、合意書を取り交わしたうえで活動が認められる。市からは、花壇の確保、ボランティア保険の加入、アダプトサインの設置のほか、清掃用具の提供がある。春、秋の年2回（各6,000株）購入した花苗を希望者に配布している。

配布している花の種類（2009年度）

春（5月）	マリーゴールド（混色）
	ベゴニア（混色）
	ニチニチソウ（混色）
	ポーチュラカ（混色）
	メランポジューム
	サルビア（赤）
秋（11月）	カレンジュラ
	ハボタン（混色）
	パンジー（混色）

ビオラ(混色)

プリムラ　ジュリアン(混色)

配布されるものは花苗のほか、希望すれば黒土や肥料など。

写真1　からきだの道(多摩市)

3.　町田市の緑化事業の取り組みについて

町田市は、面積72平方km、市の中心部はJR、小田急線町田駅を中心に百貨店など大型商業施設が集中し都心からも近く、市内および周辺に大学が多くあることもあって街には若者が多く集まっており活気にあふれている。一方、市の北部には多摩丘陵が広がり、七国山・薬師池公園や小山田緑地などの自然公園もあることから親子連れにも人気がある。人口は42万人。豊かな自然と神奈川県の中心である横浜や、東京都心へも電車で30分ほどで出られるという利便性の良さも加わって、古くからの住民に加えて近年、急速に人口が増えている。町田市は、市内に350以上の花壇づくりのボランティア団体があり、春・秋の年2回の花壇コンクールは35年の歴史があるという緑化活動の盛んな市である。下記に町田市で展開されている主な緑化事業について紹介する。

①花のまちづくりコンクール

2009年度で10回目を迎えた、年1回おこなっているコンクールである。市内が花でいっぱいになることを目的に、個人や地域のまとまったグループ、事業所などが道行く人が楽しめるように外へ向けて玄関まわりや道沿いなどを季節の花や緑で飾ることを対象としている。

②花壇コンクール

1973年に始まった春、秋の年2回実施されているもので「花の香り漂う美しいまちづくり」に寄与することを目的としている。参加条件は、公共的空間に10㎡以上の花壇用地があり、10人以上の仲間で管理すること。

花壇に植える花苗は、市営小山田苗圃で育てた苗を年2回配布しており、公園、道路、学校、幼稚園など公共的な場所に市民参加で花を植えて育て、花壇コンクールで美しさを競う。これは花と緑いっぱいのまちの実現に向けて共に考え、共に育て上げていく事業として位置づけられており、日常の管理を通して地域のコミュニケーションを育むことや、市民と一緒に環境づくりについて考え、参加することによって生き生きと生活できる健康づくりに役立つことに繋がることも期待されている。

③花と緑の交換会

植物を持ち寄り交換しあう「花と緑の交換会」は春と秋の年2回開催されており、家庭で殖やした植物を持ち寄り交換することにより、花とみどりいっぱいのまちづくりに寄与すること、住民のコミュニケーションを花とみどりを通して図ることが目的となっている。

また、「花と緑のリサイクル」も同時開催される。育てることが出来なくなった植物や、沢山増えすぎたものを人に譲りたい場合は、交換会の開催に合わせて開催期間を5日間と余裕を持たせて設定することで、それぞれの都合に合わせて植物を持参できるように配慮されている。

④花とみどりの教室

年4回、季節にあわせて花と緑の知識を学ぶために開かれている。植物の育て方、飾り方、楽しみ方をテーマとして専門家の講師を招いて花とみどりのまちづくりに関する必要な知識や実践力を養うために行われている。これらは、花とみどりの活動に対して興味を持ってもらうことが最大の目的であり、その他の市民参加の緑化活動の入り口になれば、ということで市内の忠生公園内の屋外でおこなうなど、誰もが気軽に参加してもらえるように配慮されている。

4.　両市の市民ボランティアによる花壇について

多摩市は、学校･保育園などのPTA活動や一部の市役所前のコンテナなどを除き、市内の公園等を含めてほとんどの花壇をアダプト制度で管理している。市役所内の管轄は、道路に沿った部分については道路交通課、公園や緑地内についてはみどりと環境課、と分かれているもののボランティアが関わる花壇は、大半がこのアダプト制度で管理されていることから多摩市については、このアダプト制度のものを基準に考えてみたい。

一方、町田市については、ボランティア花壇の大半が、350の団体からなる花壇コンクールに参加するチームによって維持管理されている。公的空間に10㎡以上の花壇用地があり管理できる10人以上の仲間がいることを条件としており、平均面積30㎡。市は、最大100㎡分までの苗を提供している。町田市内に広がる、このコンクールに参加するボランティアによる花壇について考えてみたい。

(1)多摩市のアダプトによる花壇づくりの現状と課題点

そもそもアダプトという制度には、里親制度という意味があることからも推察されるように、管理するボランティア自身が経費および労働力を負担して維持管理することが前提となっている。そのためアダプト制度に申し込む人が多くいるということは、植物を育てることが好きで、花づくり、花壇づくりの技術を自宅の庭やベランダだけで発揮することにとどまらず、地域という公共の場で広く披露することで多くの人に喜んでもらいたいという人たちが沢山いることを意味する。

多摩市は春と秋に各6000ポットの花壇用花苗をそれぞれの面積に応じて配分しているが、不足分は各自で苗を用意し、植え、管理することが前提となっている。

今回視察したいくつかの花壇では、それらの多くで花壇面積に対して苗数が少なく空き地が多いことが目についた。土の量が少なく貧弱な印象を与えてしまう花壇や土質が悪く植物がうまく育っていない花壇など全体に花壇づくりについての基本的な知識や植物栽培の技術などが不足しているように感じられた。

大きな負担となる苗の購入については、準備できる苗の数に合わせて花壇面積を変更したり、常緑の植物を組み合わせることで少ない花苗をいかに用いるかなど、問題点に対する対策を発想することができるようなボランティアが育っていくことは市にとっても、ボランティア自身にとっても大切なことであるはずだ。アダプトという制度が結果的に都合の良いボランティア任せの活動となってしまうことを避けるために、花壇や緑地の維持管理に必要な知識と技術を学ぶ場を設けること、適切な教育システムの必要性を痛感した。

写真２　遊歩道の植栽帯に花壇をつくる（多摩市）

写真３　この植栽地をどうするか（多摩市）

（2）町田市の市民によるボランティア花壇の現状と課題

ボランティアが維持管理する花壇については、2009年度の春の花壇コンクールを例にして考えてみたい。

2009年度（第73回）春の花壇コンクール概要＊3

○審査対象団体数：350団体

部門別参加団体数・割合

1　学校の部・・・・・・・・・・60団体（17％）

2　道路の部・・・・・・・・・・84団体（24％）

3　公園・団地など花壇の部・・205団体（59％）

○花壇登録総面積：10. 317㎡

○苗の配布期間：2008年11月21日（金）～11月28日（金）

○苗の配布場所:町田市営下小山田苗圃

○配布草花の種類・配布株数

配布草花の総本数:394.000株(1㎡あたり約38株)

ビオラ　5種	76.088	ベニジューム	25.758
アイスランドポピー	41.305	アリッサム	20.646
ノースポール	41.305	セントーレア(試)	12.330
デージー	25.758	キンギョソウ(試)	9.193
カレンジュラ	22.659	ハナビシソウ(試)	10.317
クレピス	7.131	アグロステンマ(希)	20.646
ムラサキハナナ	30.971	チューリップ	9.192
ワスレナグサ	15.425	リナリア	20.646
シロタエギク	5.099		

合計17種類(うち4種類試験的、希望配布)

○予備審査実施期間:2009年4月6日(月)～4月9日(木)

・全参加団体の花壇350か所について現地調査を実施

○一次審査会実施日:2009年4月10日(金)午後3時～午後5時

・入賞対象団体(50団体)の選定

・本審査会対象団体(20団体)の選定

○本審査会実施日:2009年4月14日(火)午前8時30分～午後5時

・本審査会対象団体数(20団体)

1　学校の部　・・・・・・・・・・・・2団体

2　道路の部　・・・・・・・・・・・・6団体

3　公園・団地など花壇の部　・・・12団体

○入賞団体:50団体

最優秀賞1、優秀賞3、優良賞13、努力賞33団体、選出発表

写真４
病院内のグループホームの屋上花壇(町田市)

写真５
デッキの足元には花の紹介が(町田市)

町田市の花によるまちづくりを推める上で、欠かせない存在となっているのが、市営の下小山田苗圃である。年間約80万株の苗をタネから育て、春と秋の年2回、配布している。苗は各団体に対して、1㎡当たり38～40株。配布苗が小さいことから、配布数は実際に必要な数よりも多く設定されている。小さな苗を育てて花を咲かせることは、活動の初心者にとっては簡単なことではないが、植えた草花に対して愛着が湧き、育てていくことに楽しみを感じられるようになることからプラスに作用しているはずだ。さらに、慣れてきて多くの苗が立派に育つようになると余剰苗が増え、それによってデザインの工夫ができ、ボランティア団体の栽培技術の向上を実感できることは励みになるだろう。毎回、17～18種類の苗が配られるが、新しい種類を加えたり、草丈が高い種類も入れて希望者に配布するなど細やかな配慮もある。

町田市が長年にわたって、花壇を作ることによって得られる効果を理解し、多くのボランティア団体を増やすために市営の苗圃を作り、運営してきたことは現在のように市内350団体が参加する花壇コンクールとして発展したことの重要な一因となっている。花壇用苗をタネから育てることは市販品では入手しにくい多種多様な苗が用意できるうえ、購入するよりも安価である。もちろん育苗、栽培については手間がかかり栽培技術も育苗場所も必要なので、いちがいに安くて良い、ということだけを前面に出して語ることはできない。

またホームページを積極的に活用して、配布する苗の種類や育て方、コンクールに入賞した花壇についての情報(どの点が評価されたのか、など)を公

開しており誰もが参考にすることができるようになっている。

市の公園緑地課の方にお話をうかがってみると、350団体に同じように苗を配布しても、栽培技術の差により生育にばらつきがあること、活動の当初は意欲的であってもその活動が長く続かない団体があったり、配布する苗の種類が毎回同じようになりがちであること、などいくつかの問題点があることも明らかになった。

5. それぞれの活動から見えてきたこと

多摩市については、市内に広がる緑地の整備に市民の協力を得て活用したいという姿が見てとれる。開発に伴い、緑豊かな街のイメージに沿うようにつくられたであろう緑地は、年月を経て大きく成長し、その整備にまで十分に手がまわらないというのが実情だろう。里山管理を中心にした「グリーンボランティア講座」は、その一環といえる。

花壇については、予算をかけずに維持管理するためにアダプト制度を取り入れているが、活動する市民の力を十分に引き出すところまでは残念ながらいっていないようだ。花壇づくりの基礎はもちろんのこと、ボランティアによる活動が、都合のよい便利な労働力と誤解されてしまうような活用のしかたにならないように、ボランティア活動そのものについて市と市民の両方が学ぶ必要がある。

町田市については、すでに花壇コンクールや花のまちづくりコンクールにおいて歴史があるが、長く続けているとコンクールの開催自体が目的となってしまいがちなので注意が必要だろう。花やみどりのある市、という実績づくりについては、これまで順調に活動を広げてきた。今、次のステージへ向かう時期がきていると言えるのではないだろうか。参加団体が増え、まちの中に花壇が増えることで満足していては、圃場を作っただけの物理的な効果に過ぎない。活動の結果、それらのイベントの開催によって街並みや公園の花壇がどのように変化し、レベルアップしたのかを検証する必要もあるだろう。花壇コンクールの影響が明確に現れていないようであれば、それは審査する側の問題であり、講習会がその役割を果たしていないと言わざるをえない。

「花や緑でまちを美しく」、「市民参加のまちづくり」、「ボランティア活動を支援している市」ということに関しては、誰からも歓迎されることだろう。しかし、その目的は何だろうか？花の咲く美しいまちとは？ボランティア活動をしたその先にある暮らしって？ただ漠然とまちに花を増やしたり、緑化を推進することで満足するのでなく、実際にどんな花壇を作りたいのか、その花壇でどんなまちにしたいのか、そうした花や緑をどのように活用して自分たちのまちをより住みやすいまちにしたいのか、その具体的なビジョンを考えることは大切なことだろう。せっかくの予算をより効果的に活かすためには、ボランティアに限らず一般の市民の人たちにもより明確なビジョンをもってもらうために市がサポートしていく必要があるだろう。ビジョンについて共に考え、それを実現させるためには、花や緑化のことのみならず、まちづくり、都市論、ガーデニング論、デザイン論、ボランティア論などについて、しっかりと学ぶ機会を作っていく必要があろう。

写真6
多種多様な植物が植えられた鶴川駅前
みちのべ公園(町田市)

6. まとめ

植物を育て、その場所にふさわしい、目的に添った花壇をつくることは楽しく、さらに奥深い魅力がある。まちの中に、美しい花壇があることは、そこで暮らす人の心を和ませ、誰からも喜ばれることだが、維持管理に莫大な予算が必要になると簡単に面積を増やすこともできない、というのが一般的な考えだろう。

園芸について長年にわたって学び、その知識と技術を貯えてきた恵泉女学園には、小さな家庭の庭から暮らしの場である公共空間に至るまで様々な

場所での植物の利用法や栽培ノウハウがある。個人のために楽しむ花壇づくりとは違って、公共の場で花壇をつくる際、考えておかなくてはならないことがいくつかあり、それを知り、学び、地域の仲間たちと共に協力しながら作っていくためには、園芸の知識と技術を習得すると同時に、ボランティア活動についても同じように学ぶことが必要である。

多摩市と町田市の境界地域に位置する恵泉女学園大学は、地域における園芸ボランティア活動を支援するために、園芸に関するボランティア教育のシステムをつくり、周辺地域の方が学べる体制を今まで以上に整えていくことを今、求められている。花壇づくりには、限られた労力で最大の効果を生み出すための知識と技術が不可欠である。そのための一つが、花苗をタネから育てる技術の習得である。また、より効果を出すためには、デザインについても学ぶ必要がある。暮らしの中にバランスよく植物を配置し、年月を経ても美しく維持管理することを学ぶためには、ガーデニングについても基礎を学ぶ必要がある。

ボランティア活動は、行政と市民とがどのように関わるかで活動の成功を左右するともいわれている。大学が今求められていることは、研究機関、教育機関としてこれまで蓄積してきた技術と知識の集積を有効活用するために、それらを分析、整理し、一般の人達＝ボランティアの人達に、より分かりやすく教えていくシステムを考え出していくことだろう。大学はその存在を存分に活かして市や市民が目指している方向に向けて考える場をつくり、よりよく暮らし、生きるためにも、地域の中で活動する園芸ボランティアの育成、活動支援のために体系的に学ぶ場を今後も提供し続けていくことが大切であり、それが地域の大学としての社会的責任であるといえよう。

参考文献：

＊1　恵泉女学園大学園芸文化研究所報告2008年「園芸文化」第5号pp.158-166

＊2　恵泉女学園大学園芸文化研究所報告2009年「園芸文化」第6号pp.142-153

＊3　町田市配布の花壇コンクール資料より